プライベート美術館ガイド

2017

PRIVATE MUSEUM

奈良を味わうために

プライベート美術館とは？

お店の方に聞いてみました　おしえて！プラ美の魅力

出展者さん訪問　プラ美作品はこうして生まれる！

ルポルタージュ　時代の記録者、松本紀美代さんと写真

プラ美スタッフの思い出

2015年度プライベート美術館 展示風景　会場：ポリクコーヒー　作品：新 隆治「33番街」

第32回国民文化祭・なら2017
第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会

プライベート美術館の心得 三カ条

その1　アートを身近に楽しもう！

アートの楽しみ方に王道はありません。まずはどんな形でもいいから、自分の身近な場所、好きな空間でアートを楽しむ場を探しましょう。

その2　「よくわからない」も大事です！

よくわからないけど、なんだか惹かれてしまう作品がある。そんなあなたは、もうアートに出会っています。想像力を働かせながら、作品との対話を楽しみましょう。

その3　経験を分かち合おう！

みんなでワイワイいいながらご飯を食べると幸せになるように、作品から感じたことを誰かと共有してみてください。思いもよらなかった発見があるかも！

プライベート美術館

2017.11.1（水）→ 15（水）

※一部をのぞく

近鉄奈良駅周辺店舗、ほか県内各地

橿原エリア 八木札の辻／今井町 のみ
2017.10.27（金）⇒11.5（日）
＊展示時間は各店舗等の営業時間に準じます。

PRIVATE MUSEUM

プライベート美術館は、公募によって集まった奈良県内の障害のある人のアート作品を、日常のなかで楽しむプロジェクトです。これまで、近鉄奈良駅周辺の店舗等で展示をしてきましたが、今年は「第32回国民文化祭・なら2017」「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」の開催にあわせ規模を拡大し、県内70ヶ所で約380点の作品展示を行います。是非、まち歩きとともに、お楽しみください！

お問合せ先
第17回全国障害者芸術・文化祭実行委員会事務局　プライベート美術館担当
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4　一般財団法人たんぽぽの家内
Tel: 0742-43-7055　Fax:0742-49-5501　E-mail: happyspot@popo.or.jp

PRIVATE MUSEUM

プライベート美術館とは？

何もない壁に絵を一枚かけるだけで、魔法がかけられたように場の雰囲気が生まれ変わることがあります。プライベート美術館（以降、「プラ美」と省略）は、このようなアートの醍醐味を日常のなかで楽しむプロジェクトです。その仕組みはとてもシンプルです。

①障害のある人の作品を公募し、数日間、一ヶ所にまとめて展示します。これを「お見合い展示」といいます。

②作品の展示を希望する店舗のオーナーやスタッフがお見合い展示に来場し、展示したい作品を決めます。

③展覧会期に各店舗に作品を展示し、多くのお客様に作品を楽しんでもらいます。

プラ美は、仕組みはシンプルですが、見立ては壮大です。町全体を一つの大きな美術館に見立て、町に暮らす人や町行く人が美術館のお客さんになります。権威ある誰かが決めた基準ではなく、町の人が自分自身の目を通して、障害のある人の表現を楽しむ。そしてお店の人は町の学芸員として、自分たちの空間を一つの展示室ととらえ、見に来たお客さんがより楽しめるよう展示を工夫します。

近代的な美術館はフランス革命をきっかけに始まったといわれています。かつて王侯貴族が自分の屋敷（プライベート空間）で楽しんでいた美術品を市民が奪取し、公共空間で、誰もが鑑賞できるようにしたのが美術館という制度でした。美術館の誕生は市民とともにありました。プラ美は、この根本的な思想を現代の奈良によみがえらせようとする試みであるといえます。

この冊子は様々な角度からプラ美の全体像に迫ります。これまでプラ美は近鉄奈良駅周辺の店舗を中心に展開してきましたが、今回は、奈良県内の社寺にもご協力いただくなど、地域的にも会場ジャンル的にもぐんと規模が拡大しています。奈良のまち歩きのお供となるプラ美マップとともに楽しんでいただければ幸いです。

↑ プライベート美術館
会場案内マップ（2017）

お店の方に聞いてみました

おしえて！プラ美の魅力

古都・奈良には文化を愛し文化を支えるお店が多数存在しています。プラ美に参加しているお店の方に、プラ美の魅力についてお聞きしました。

① さくらバーガー

山戸旬人さん
TEL 0742-31-3813
奈良市東向北町6
11:00 ～ 16:00(LO15:30),
17:00 ～ 21:00(LO20:30)
定休日：水・木曜日

はじめてお見合い展示に参加した時、衝撃を受けたんです。凄い作品が沢山並んでいる…と。この驚きを、多くの人にも知ってもらいたいです。なるべくお客さんの目にとまるよう、展示は工夫しています。食事をしながら眺めて貰えるように、テーブルの近くの壁際にかけたり、作品の隣に、パンフレットやメッセージカードもセッティングしたり。作品に注目しているお客さんには、「こういう企画なんです」「どう思いますか?」「他のお店にも行ってくださいね」というように、意識して話しかけるようにしています。話しかけると感想を言ってくださったり、カードに書いてくださったりするお客さんが多いです。

② よしだTOY'S

吉田真弓さん
TEL 0742-23-2030
奈良市西木辻町211
9:30 ～ 20:00
定休日：水曜日

個人的に障害のある人の作品は以前から興味がありましたので、お見合い展示では好みで選んでしまいそうになるのをぐっと抑えて、これはあそこに置くとおもしろいかも!など、具体的にイメージしながら選ばせてもらっています。当店ですと、おもちゃの中に展示することになりますので、作品やその空間の魅力がアップするお互いの相乗的な関係をいつも楽しみにしています。例えば、恐竜コーナーに恐竜の作品があったり、カラフルなドイツの木のおもちゃたちと同化してみたり、キラキラした素材の作品は外光があたる場所に…。展示中は、作家さんが来店されることも楽しみのひとつです。そこではじめて、こんな人が描いていらっしゃるんだ!とわかるんですよね。作家さんと仲良くなって、絵を見たあと、店内で一緒にボードゲームを一戦、ということもあります。

③ 萬御菓子誂處 樫舎（かしや）

喜多誠一郎さん
TEL 0742-22-8899
奈良市中院町22-3
9:00 ～ 18:00
定休日：なし

初年度から参加しています。年々ボリュームが増えてきて、作品を選ぶだけでも楽しいですね。作品はなるべく、店内に合うものを選んでいます。お客様に、調和のとれた空間だと感じていただけるように。お客様にはできるだけ話しかけ、企画や作品のことをアナウンスしています。作品を通して、あたたかい気持ちになっていただけているように感じています。日ごろからスタッフに伝えているのですが、お客様はお菓子そのものではなく、その背景である「影」の部分を召し上がっていただいている。芸術作品も同じで、「良いな」と感じる作品はもの自体ではなく、隠された影の部分の魅力が大きい。障害のある人の作品は、よりその部分が強いと思います。この企画を通して、そういった価値観が評価される世の中になって欲しいですね。

④ よつばカフェ

松本吉高・よしえご夫妻
TEL 0742-26-8834
奈良市紀寺町954
11:00 ～ 19:00(LO18:00),
2F作品展～ 18:00
定休日：水曜日（祝日の場合営業）

前回から初めて参加しました。実は7年前の初回の時にもお声がけがあったのですが、都合がつかず見送ることに。その後も、知り合いの参加店舗さんから話を聞いて興味は持っていて、ご縁が重なり昨年から参加することとなりました。作品を選べる面白さがあるし、この企画だからこそ出会えるお客さんもいるし、とても楽しんでいます。前回は2階のスペースに飾ってみたのですが、今回は色々工夫してみたいですね。どうしても、普段から店内にある絵と思われがち。作品を一か所に集めてコーナーにするのか、それとも、お食事しながら見える場所のほうがいいのか。他の店舗さんの展示も気になりますね。マップの存在が大きくて、これがあるからこそお客さんが巡りやすいと思います。参加の間口は広くして、まだ知らない人にも知ってもらいたいと思っています。

⑤ ベニヤ書店

川岸泰子さん
TEL 0742-22-5050
奈良市花芝町16
9:30 ～ 19:00
定休日：日曜日

毎年、お見合い展示会場に伺うときはドキドキします。それぞれの作品がもつ固定観念にとらわれない自由な雰囲気に魅せられています。作品は、いつもインスピレーションで選んでいます。傾向としては、抽象的なものが多いですね。好きな絵を選ぶうち、気づかずに、昨年と同じ作家さんを選んでいることも。一見なにか分からない絵で、「馬かな?」と思ってタイトルをみたら、やっぱり馬だった。その作家さんと感性が通じ合う瞬間があるのが楽しいです。うちは本屋なので店内に文字や画像の情報量が多いです。作品が埋もれてしまわないように気を付けています。今年も、実際に作品がうちに来て、どんな展示になるか楽しみです。大勢の方に見ていただければと思っています。

出展者さん訪問

プラ美作品はこうして生まれる！

一口に障害のある人の作品といっても、それぞれ千差万別の個性があり、魅力があります。お二人の出展者のお宅とアトリエを訪問し、作品制作にまつわる話を伺いました。

仲川佳那さん　21歳

小学1年生の頃から絵を描き始める。小学校の頃よりコンクールにて受賞、最近では展覧会などにも積極的に出展している。これまでの作品を見せていただいた。佳那さんの成長にあわせ、いろいろな画材や技法が試されており、バラエティに富んだ作品に驚いた。

今回応募された作品の中に、「スザクが見てる」というタイトルの可愛らしい犬の絵がある。これは佳那さんが小学5年生の秋に描いた作品だという。生まれて間もないスザクが仲川家にやってきたのがその年の春。それまで犬を怖がっていたのが嘘のように佳那さんはスザクの世話をはじめた。朝夕欠かさず散歩に出かけ、ご近所の方々にも元気よくご挨拶。スザクを通じてごく自然に佳那さんと地域とのつながりができた。

受賞作品以外にも、素敵だなと思う作品はあると、お母さんのともみさんは言う。その中の一枚、幼い頃に描いた鳥の絵に惹きつけられた。その鳥は怒っている。笑うスザクに怒る鳥。人、動物、花…佳那さんの絵には表情がある。佳那さんは線で対象の輪郭を追いかけるよりも、色面を大胆に重ねて表情に奥行きをもたせることが得意のようだ。大人になり抽象度の増した絵の中にもその特長は活かされている。佳那さんの絵は成長し、変化している。しかし変化のなかに不変の佳那さんもいる。今後も成長が期待される楽しみなアーティストの一人だ。

→愛犬スザクと一緒に

聞き手　一般財団法人たんぽぽの家・後安美紀
写真提供　仲川ともみ

1 一昨年度出展作「ダリア」の展示風景。カフェ「はなや北川」にて。2 今年度出展作「スザクが見てる」3 絵本『おとなしいめんどり』を読んで描いた絵。最後に皆を一喝するめんどりの姿。

羽島琉之介さん　16歳

羽島琉之介さんは、紙とペンが目に入ったら描いているらしい。描きはじめは幼稚園の年少の3歳の頃で、当時はクレヨンを持ち歩いていた。初めて描いたのはウォルトディズニーのロゴ。お城なども描いていた。しかし今はカラーペンを好み、クレヨンや色鉛筆も好きではないそう。理由は、カスが出て汚れるのが嫌だから。

作品をとても大切にしていて、スケッチブックが1冊あれば、1枚1枚に大事に丁寧に描いていく。さらにお気に入りの絵を表紙にするために、紙を重ねてマスキングテープで綴じてしまうこともあるらしい。

いつでも沢山楽しく描いているが、ときには描きなおすこだわりもある。ただこれは、彼の通う事業所「ぐるんぱ」でのこと。家ではあまり描かないそうだ。

去年の作品は白の画用紙にカラフルだったが、今年は黒の画用紙に白だけで描かれている。黒に白で描くことが全く違っておもしろいようだ。また、みんなで楽しく描くのも好きだが、スタッフのアイデアで一人で描きはじめたらそれも楽しくなったようだ。

画材や技法をちょっと変えて、障害のあるなしに関わらず、その子独自の能力を伸ばしたい・何でも経験させたいというスタッフと親御さんの大事な思いもこめられた作品は、今年も喜びと驚きの声を呼びそうだ。

聞き手　Good Job!センター香芝・半田朱実

←手本の線を迷いなく正確に写し取る

→「ぐるんぱ」のみなさん。上牧町の若い事業所で、プラ美には昨年度初参加。二度目となる今回も多くの応募があった。

1 今年度出展作「パーフェクトベイビー」
2 昨年度出展作「まち」

ルポルタージュ

時代の記録者、松本紀美代さんと写真

取材・文　一般財団法人たんぽぽの家・後安美紀
写真提供　松本紀美代

プラ美に参加する全ての会場を回っている方がいる。その方のお名前は松本紀美代さんという。松本さんは一九四〇年生まれ。奈良で生まれ育った。戦前、戦後の昭和の奈良を知っている世代の方だ。カフェ・ギャラリー「アートスペース上三条」のお客さんのお一人で、ならまちにお住まいだという。同ギャラリーのご紹介により実際にお会いすることができた。

去年のプラ美を撮ったアルバムを見せてもらった。ご本人は何も語らずとも、アルバムそのものが圧巻の情報量を持っていた。1番目のお店から最後48番目のお店を順番に丁寧にファイルしてある。一つのお店につき、展示された絵の様子だけではなく、お店の看板や、食べたもの、気になる商品の写真、時にはお店のレシートまで、見開きいっぱいにそれぞれ工夫を凝らしてレイアウトしてあった。アルバムを開くだけで、楽しい。冬のちょっぴりぶっきらぼうにも見える奈良の佇まいが記録されていた。自分はまだ行ったこともないのに、なんだかわくわくした。

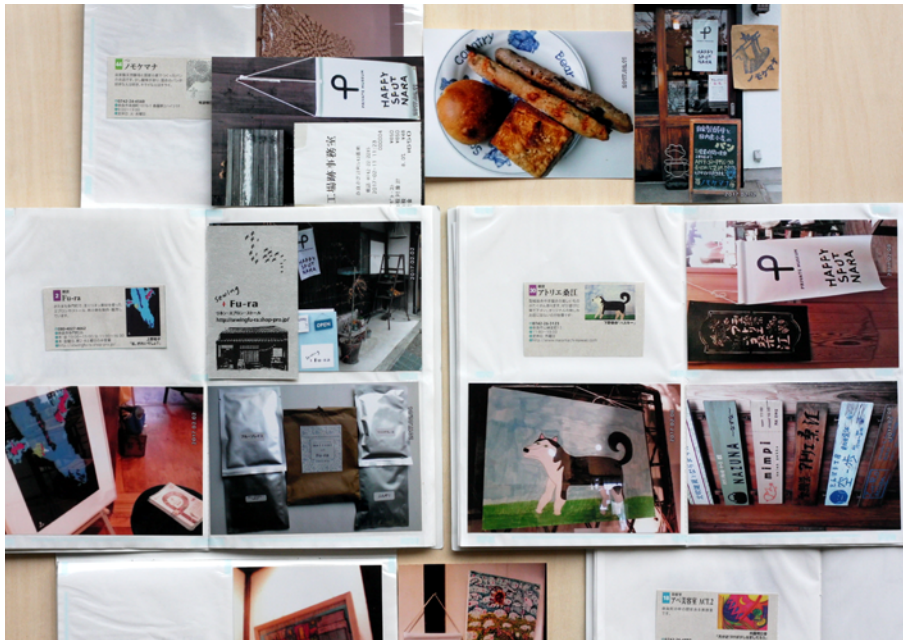
松本さんは、たいていは一人でお店めぐりをしているという。常連のお店だけをひいきするのではなく、プラ美をきっかけに自分の知らないお店に行くのも楽しみの一つだそうだ。出展者に知り合いはいない。だからこそ、どの作品にも同じように向き合えるのが、自分の絵の見方の特徴だと思っている。そして記録に残す。アートスペース上三条さんは、「これはなかなかできることではない。松本さんは時代の記録者なのです。」と言う。

松本さんとカメラの付き合いは長い。10歳年上のお兄さんのカメラを借りて、中学生か高校生のときから写真を撮っていた。結婚してからもカメラを持ち、お子さんと出かけた場所を撮っていた。当時、松本さんの撮った写真は『写真アルバム奈良市の昭和』(樹林社)にも収められている。昭和49年の押熊町のレンゲ畑など、今ではなかなかお目にかかれない光景の写真を目にすることができた。

松本さんの撮る写真には、一瞬の美をとらえてやろう、時代を記録してやろうという気合や、構えたところが一切ない。しかし松本さんという存在、集合した写真群から、たくさんのもの語りが聞こえてくる。私は確かにそこにいて、それを見たのだという思いが伝わってくる。

「プライベート美術館は、町全体を美術館に見立てた壮大な試みですよね。」と最初に教えてくれたのは、アートスペース上三条さんだった。そして同ギャラリーでの語り合いをとおして、松本さんの記録行為は、市民による新しいアートの支援の形ではないかということに気づくことができた。かつて文化芸術の支援といえば、富と権力を握った一部の人間が行うものだった。しかし新しい支援方法はもっと分散的かつ集積的な方法をとる。プラ美作品の展示されたお店に行く、一つ一つの行為は、ささいなことで、やろうと思えば誰でもできる。しかし、それを全部平等に回って記録することなど、誰にでもできることではない。松本さんの存在がどれだけプラ美出展者やお店の方々、現場スタッフの励みになるか。その精神的効果は計り知れないものがある。

松本さんは帰り際に、次回からプラ美に参加してみたいと考えているお店を紹介してくださった。そこのお店の方は、プラ美のことをこれまで知らなかったそうだが、松本さんがアルバムを見せると興味をもったらしい。いずれこちらからご挨拶に伺うことを約束した。このようにして自然に人の手を介してプラ美は広まっていく。町の人たちが耕し、より豊かになった奈良の土壌のなかに、プラ美は根付いていく。



プラ美スタッフの思い出

プラ美を今回初めて知った方も多いはずだ。しかしプラ美の歴史は意外と古い。プラ美の現場裏を知る一般財団法人たんぽぽの家のスタッフが、これまでに経験したプラ美にまつわる思い出を語った。

「うと・うと」エントランス風景
（撮影：松本紀美代）

たけうちしんいち

アート系ボランティアから始め、いつの間にかたんぽぽの家スタッフに

3回目くらいの奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA（注）にボランティアスタッフとして初めて参加しました。初めて現場に行った日、できたてほやほやのマップを全店舗に配るよう言われて、自転車に乗って配って回りました。それがプラ美との最初の出会いです。

もともと僕は奈良が好き、アートが好きで、奈良でアート関係のボランティアをやってたんです。アート展示で面白いのは会場係だと思っています。会場係って、誰も来ない時間、ひとりでぼーっとする時間がたまにあるんですよね。何もしないでいる、静寂の時間が。仏教の修行みたいなところがあります。僕は一時期、座禅にはまっていたんですけど、座禅や立禅（りつぜん）のように、音を立てないで丁寧な所作でその場に存在することの得難さがあって、そこに会場係の面白みを感じています。

ボランティアの翌年から、プラ美に本格的にかかわることになりました。

（注）二〇一一年より始まった奈良県内の障害のある人たちの表現を知り、そのユニークさや多様性を発見するプロジェクト（主催　奈良県）

大井卓也

アーツマネジメントを研究する大学院を修了し、去年からたんぽぽの家スタッフに

去年、プラ美の旗を配るのに自転車で回りました。いいお店は奥まったところによくあって、ならまち界隈と自転車の相性がいいと思います。あんまり奈良のことを知らなかったので、こんなおしゃれなお店があるんだとか、こんな風に展示されているんだとか、これまで作品しか見ていなかったから、いろいろ実際に知ることができてよかったです。

（回っていて印象に残ったお店はありましたか？）そうですね、「うと・うと」っていう、ごはんどころ、ギャラリーもやっているお店があって、旗を置かせてもらったらすぐに行くつもりだったんですが、そのお店のご主人が、「いいから上がっていけ」と。作品以外にもいろいろなモノが置かれてある店で、そう、壁一面の本棚のなかに、天井桟敷の本とかが色々あって、「昔はこうだった」とか寺山修司の話になりましたね。ご主人はアートにも詳しくて、「これもこんなふうに置いていたら、アートや」とか。30分くらい居たでしょうか。忘れることはできません。

春田千尋

HAPPY SPOT NARA運営委員を務め、今年、たんぽぽの家プロジェクトスタッフに

この冊子の店主インタビューを担当してもらったのですが、よく知っているお店も多かったとか？）はい、学生の時から、ならまちが好きで住んでいます。さくらバーガーさんには学生時代から通っていました。

今年初めてスタッフとしてプラ美のお見合い展示に関わって、何が印象的だったかというと、たくさんの絵に囲まれて、たけうちさんがまるでプラ美ソムリエのようだったことです。「うちのお店のあの壁にこれ合うと思う？」、「そうですね、カフェ＊＊さんだったら、あっちよりこのサイズもいけるんじゃないですかね。一回やってみましょうか？」とか、きらきらしたプロフェッショナルって感じでした。

岡部太郎

学生インターンのときから数えると、たんぽぽの家スタッフ歴、はやもう16年

プラ美は、二〇〇五年、滋賀の大津で「ひと・アート・まち」（主催　近畿労働金庫）の一企画として始まったんですね。アートは美術館の中だけにあるのではなく、町なかに、ひとりひとりの生活のなかにあるという思いが、企画を立ち上げる原動力としてありました。「ひと・アート・まち」は関西の都市を巡回する企画で、二〇一〇年に大阪の南船場で開催した時は、御堂筋沿いの難波神社に大きな絵馬を作品として展示し、町行く人たちを驚かせたりもしました。二〇一一年からは、僕らの地元で継続的に開催したいと思い、プラ美はHAPPY SPOT NARAで引き継ぐことにしました。

奈良で一過性のイベントではなく、一つの場所で時間をかけてやってきたからこそ、いろいろなものが見えるようになってきました。作品を出す側の意識も少しずつ変わってきたんじゃないかなあ。自分の欲望をそのまま描いたような作品だけでなく、ここに展示されたらいいなあという希望のようなものが出てきた。宛先ができてきたというか。額装にも気をつかったりと、サポートするスタッフの意識も変わってきていますね。

プラ美は作品を参加しているお店に押しつけるものではないんです。絵を選ぶのは主催者ではなく、お店の人たちなんですね。僕だと絶対に選ばない絵を、お店の人がいきなりぱっと選ぶ。内心、「えーっそれを選ぶんですか？」と思うのだけど、いざお店に飾ってある絵をみると、それがすごくかっこいい、よく似合っていると思うことがあって。自然と多様なアートを受け入れることができるというか、僕自身の目が肥えていくような瞬間に立ち会えることがあります。